

研究大会、2月10日の芦屋市解放教育研究会などの同和教育関係の集会に出かけることが多かった。

12月25日から高体連主催のスキー教室が実施され、1月7日には1年生男子の全国高校ラグビー大会見学が行なわれた。費用は800円で、生徒たちはバスで花園ラグビー場へ出かけた。そして3年生の卒業試験最終日の1月29日には、校内マラソン大会が実施された。2月25日に芦高第29回卒業証書授与式が行なわれ、第32期生男子218名、女子223名、計441名が卒業した。この年は女子の卒業生がはじめて男子より多かった。

3月16日に高校入学者選抜学力検査が実施され、20日に合格者450名が発表された。なお1976（昭和51）年7月9日に、県教委は「兵庫県公立高等学校入学者選抜について」を発表し、「入学者選抜要綱」の一部を改訂し、兵庫方式の手直しを行なっていた。それは、調査書を「入学者選抜の主資料とする」から、「原則として調査書を主資料とする」に改め、学力検査の時間を120分（検査1・検査2）から150分（検査1～検査3）とし、学力検査の比重を高めるものであった。また同和関係については、これまで「選抜要綱」の311項でふられていたものが313項に改められ、副申書は添えないこととなった。

入学者選抜の改訂にともない、進学保障をめぐって精道・山手両中学校との中高連絡会が、12月から2月にかけて数回開かれていた。12月10日の芦屋市教委主催の中高連絡会では、中学校の保護者会に高校側も出席し、次年度の入学者選抜について説明してほしいとの要求があったが、本校としては、「県下同一方法で入学検査を行なうので特別なやり方は出来ない」として出席を拒否した。2月は中学校や市教委から、志願者の事情説明に来校することがしばしばであったという。もっともこの年は、中学校が進学保障を求めている生徒はいずれも定員の枠内で合格した。同和問題をめぐる情勢は変わりつつあった。兵庫県はすでに行政と運動を分離し、行政の主体性を確立することを方針としていた。そして県教委は定員枠の厳守を各高校に指示した。こうして本校における進学保障生の受け入れは、定員の枠内ではあったが、この年の入学生を最後とすること

になった。

なお南館1階のピロティーを3室に区切り、数学準備室・小会議室および相談室とする工事が、2月10日に着工され、3月31日に竣工した。相談室は生徒との個人面接などに利用される予定であった。このピロティーは、本館改築後は自治会室として用いられて現在にいたっている。

5 共通一次試験のはじまり(1977～80年)

初の大学入学者選抜共通第一次試験（共通一次試験）は、1979（昭和54）年1月13・14日に実施された。過熱した受験競争の緩和を目的とするこの共通一次試験は、マークシート方式の客観テストで5教科7科目にわたっての試験であった。これまでの1回だけの学力検査を改め、難問・奇問を解消することを目的に、一次試験では高校での一般的、基礎的な学習の到達度がはかられ、各大学が独自に実施する二次試験では学部・学科の専攻に応じた適性や能力が検査された。そして各大学は共通一次の成績と、二次試験の結果や調査書などを総合して、合格者を選抜することとした。また共通一次試験の実施とともに、国公立大学の入試期日が一元化され、従来の一期校、二期校の区分はなくなった。

能研テストを実施していた能力開発研究所が解散を決定してからまもない、1969（昭和44）年2月に、全国高校長協会は文部省に大学入試制度改善の要望書を提出した。翌年に高校長協会は、調査書重視と共通テストの実施を文部省の大学入試改善会議に要望した。これを受けて1971（昭和46）年12月に大学入試改善会議は、「大学入学者選抜方法の改善について」を発表し、調査書・共通テスト・大学独自試験の併用による選抜を、大学入試改善の方向とした。また国立大学協会も入試改善の研究に着手し、1972（昭和47）年9月に「全国共通一次試験に関するまとめ」を発表した。1973（昭和48）年4月には、国大協に入試改善調査委員会が設置されたが、当時は共通テストの実施には懐疑的な空気が強かった。しかし、1974（昭和49）年11月から試行テストがはじまり、回を重ねるごとに試行テスト参

加者も増加し、また政治情勢ともからんで共通テスト実施への動きは本格化した。なお国立大学は新制大学の発足以来、一期校、二期校に分けられていたが、二期校側はそのことに対して大きな不満を抱いており、共通テストの実施と抱き合わせで入試期日の一元化を求めた。こうした中で、国大協は1976（昭和51）年11月に、共通一次試験は1979（昭和54）年実施が可能であるとの結論を出した。

1977（昭和52）年に文部省は「国立学校設置法」の一部を改正し、大学入試センターを設置する法案を国会に提出し、5月2日に大学入試センターが発足した。こうして共通一次試験の実施は確実となつた。しかし、共通一次試験の目的については、世間一般と大学側とではかなりの認識の相違があり、入試地獄の緩和についても、国大協は一言も触れてはいなかった。やがて試験実施が目前に迫ってくると、高校長協会は科目数や入試期日についてさまざまな要望を出すにいたり、全国高校進路指導協議会も疑問を表明した。その結果、12月下旬の試験実施期日が1月中旬に繰り下げるなどした。

共通一次試験は1976（昭和51）年度高校入学生から実施されたが、この試験制度の導入は単に国公立大学志願者のみならず、私立大学受験者にも大きな影響を与えることになった。いわゆる国公立離れがすすむとともに私立大学が難化し、推薦入試も広まった。共通一次試験が実施された後、大学入試センターは試験問題が高校教育に即して適切となり、見かけ上の競争倍率が下がって受験過熱が鎮静化し、一次の出題意図が各大学に伝わって出題科目や試験内容にさまざまな工夫がみられるようになり、私立大学にも入試改善の機運が広まると評価している。一方、共通一次に対して、自己採点をもととした「輪切り」や「序列化」がすすみ、大量かつ詳細な受験情報に頼った偏差値による大学選択が一般化したとの批判もある。また試験実施期日が高校の授業に悪影響をもたらし、科目間の難易差が高校での選択科目の履修を左右し、国公立大学と私立大学の入試方法の相違が受験生に二重の受験準備を押しつけたとの声もある。そして共通一次をへて入学した学生が目的意識を欠き、学力が似通っている

ため相互刺激に乏しいなど、大学教育におけるマイナス面も指摘された。さらに、いわゆる足切りと呼ばれる二段階選抜は受験生に大きな不安を与え、その後も続く入試制度の変更は、時に受験生をとまどわせた。

共通一次試験の実施は、高校生活にもさまざまな影響を与えはじめた。本校ではすでに1975（昭和50）年度から、校外活動全般の見直しがはじまっていた。そして共通一次試験の第1回目を受ける1976（昭和51）年度入学生から、修学旅行も廃止され、かわって一泊旅行が取り入れられた。本校におけるこれらの変更は、直接に共通一次の実施を理由とするものではなかったが、これ以後、しばしば校内行事は大学入試との関係で論じられるようになった。記念祭の春実施案は生徒の自発的な改革案であったが、共通一次試験の導入が目前のこととなるにつれ、自治会執行部は春実施案が上から押しつけられるのではないかと危惧するようになった。そして何よりも共通一次試験の1月実施は、高校生活の実質的な短縮を意味していた。

1977（昭和52）年4月8日に、第1学期始業式ならびに入学式が行なわれた。12日は創立記念日で休業日、16日は交通テストで第1時限がカットされた。前年の春と秋の遠足は雨天のため中止されたが、この年は無事に実施され、5月6日に1年生は東お多福山方面、2年生は摩耶山方面、3年生は甲山方面に出かけた。また交通ストと雨天のため2年続きで中止された対県定期戦は、ようやく3年ぶりに5月19日に晴天に恵まれて行なわれた。第18回目にあたるこの年も、芦高は13-6で県西を降した。これまでたびたび問題にされたきた芦高生の態度や服装も比較的良好で、久しぶりの定期戦は大いに盛り上がった。

第29代執行部は、例年繰り返される自治会選挙の延期と、それにともなう自治会活動の支障に対する抜本的対策を検討していた。そして、この年の1月早々に自治会規約の改正に成功し、役員任期の2週間繰り上げが実現した。その結果、役員任期はこれまでの7月1日にかわり、6月15日から1年間となった。そこで第30代執行委員会の選挙公示は5月

18日に行なわれ、執行部は選挙が順調にすすむよう努力を傾けた。はじめの予定より多少延びたものの、12人の候補者がそろって6月11日に投票が行なわれ、第30代執行委員会が成立した。これで新執行部の1学期の活動期間にゆとりができ、記念祭の準備が順調にすすむことになった。

6月4日から第21回県高校総合体育大会がはじまり、この日は1年生が開会式を見学した。この年も陸上競技部は、3年生の中西史子君が100mハードルに優勝するなどして活躍し、女子が総合3位となった。さらに中西君は近畿大会でも同種目で優勝し、全国高校総体では4位となった。サッカー部は県高校総体でベスト4となり、国体には2名が出現した。弓道部は県高校総体で女子が団体3位、国体には1名が出現した。また水泳部も近畿大会に出場した。硬式野球部は夏の大会で県のベスト8であった。なお夏の高校野球の応援で、本校応援団は応援優秀校の3位に選ばれた。文化部では、将棋部が県大会に個人2位となり、吹奏楽部は1月の県のアンサンブル=コンクールで、フルート・サックスとともに銀賞を獲得した。

7月9日から学期末考查が行なわれ、最終日の13日には防火訓練が行なわれた。翌14日から例年の通り、校内球技大会および水泳訓練がはじまった。この年の夏休みも、「夏休みの生活について」の印刷物が生徒へ配布された。前年度に不幸な死亡事故があったことでもあり、「命を落とさぬこと、品位を落とさぬこと、そして悔いを残さぬこと」が生徒に呼びかけられた。なお夏休み中の8月12日には、文化庁主催の青少年芸術劇場が開かれ、文楽「菅原伝授手習鑑」などを1年生がルナホールで鑑賞した。

第29回記念祭は、9月27日の開幕祭から10月2日の閉幕祭まで、ほぼ前年度の内容を踏襲して開かれた。28日に西宮市民会館で文化部公演、29日に体育祭、30日にクラス展示および有志公演、ギター研究部公演が行なわれた。またこの日の午後6時から、ルナホールで招待公演としてフォーク=コンサートが開かれ、「川村尚とその仲間たち」が出演した。川村尚氏は本校第17期生である。しかし、フォーク=コンサートは鑑賞希望者が多数のため抽選とな

り、このことが執行部に悔いを残した。10月1・2日は文化部展示と映画会、招待試合が行なわれ、映画会では「メリーゴーランド」が上映され、招待試合ではサッカー（対県立尼崎）とバスケット（対県立西宮北）の試合が行なわれた。



白馬への1年生の野外活動

10月14日から1年生の野外活動が長野県北安曇郡白馬村瑞穂で実施された。これまでの蓼科での野外活動をやめ、前年度から新たな野外活動のあり方を求めて模索の段階に入っていた。この年は「野外活動を定着させるための模索の2年目である」という認識のもとで、行先の選定や期間、活動内容などの検討が行なわれてきた。その結果、白馬村瑞穂の民宿で3泊、岐阜市内の旅館に1泊し、4泊5日の日程で野外活動は実施された。2日目の八方尾根・大雪渓登山や宿舎での餅つき、3日目のオリエンテリングやサイクリングなどのクラス別活動、飯盒炊さん、4日目の妻籠見学、5日目の明治村見学など、この年の野外活動は晴天にも恵まれておおむね好評であった。なお費用は生徒1人あたり2万8830円、引率の教師は16名であった。なお3連泊は本校として初の試みであり、白馬の雄大な自然や民宿の素朴であたたかいもてなしは、生徒に深い印象を与えた。なお前述のようにこの年から、2年生の修学旅行は廃止となった。また1年生が野外活動に出かけている間の18日には、2・3年生のクラス別の秋季遠足が実施された。

冬休み中の12月25日から長野県梅池スキー場で、この年も高体連主催のスキー教室が開かれた。そして新年早々の1月7日には1年生のラグビー観戦が行なわれ、2月18日に校内マラソン大会が開かれた。また2月1日に開かれた生徒大会では、自治会費の

5割値上げが承認された。ところでこのころ、出版部は3年生の引退とともに極度の部員不足に苦しんでいた。かつて「芦高新聞」が10月の発行以来、翌年の6月まで部員不足のため休刊したことがあった。同じようなことがこの時も繰り返され、1977(昭和52)年7月に第164号が発行されてから、第165号は翌年4月の発行となってしまった。

1978(昭和53)年2月25日に芦高第30回卒業証書授与式が挙行され、第33期生男子227名、女子222名、計449名が卒業した。そして3月17日に高校入学者選抜学力検査が実施され、20日に合格者450名が発表された。この年の高校入試をめぐっては、前年の秋より、芦屋市内の中学校から本校に対して、進路についての講師派遣の依頼が再三あったが、本校は依頼に応じなかった。また12月6日には、中学校から、本校の教育方針や生徒指導の方針などを文書で回答してほしいとの申入れがあり、本校は「学校要覧」にもとづいて説明した。一方、神戸地区の中学校からは、5日および7日に父兄が本校を見学に訪れた。3月には山手中育友会長・精道中育友会長・市内小中学校長会・部落解放同盟芦屋支部長の連名で次のような申入れがあり、この申入れは翌年、翌々年と続いた(「県芦高40年史」)。

1. 合格者の数を定員割れしないよう
2. 調査書を主資料とする線を守ってほしい
3. 合否すれすれの者には、調査書と検査の成績に比率を定めて合否決定することが許されているが、この比率を全体に及ぼさぬよう

そして以上のこと事が厳正に行われているかどうかについて、3月末に高校より報告することが求められた。

終業式の翌24日に、2年生は新企画のクラス別の一泊旅行に出かけた。宿泊地は福井県小浜市・三国町・芦原町・倉敷市・鳥取市・三田市・三重県菰野町湯の山・岐阜県高山市であった。クラスごとの企画であったため充実した内容ではあったが、期間が短いという声が多かった。

1978(昭和53)年4月8日に、第1学期始業式ついで入学式が行なわれた。12日は創立記念日で休業日、25日は交通ゼネストのため休校となった。26日

に生徒大会が開かれ、2月の生徒大会で決定した自治会費値上げにもとづき、1040万7990円におよぶこの年の自治会予算が成立した。予算額の多い部は、野球部45万円、サッカー部26万7000円、吹奏楽部24万円などであった。なお、前年度に極度の部員不足のため、1学期に2回の「芦高新聞」を発行しただけに終った出版部は、手間と時間がかかる活版印刷方式にかえ、ニュース性と速報性に富む新聞作りを目標に、4月から謄写印刷方式を試みた。その結果、1978(昭和53)年度は第165号から第178号まで14回も発行するにいたった。そのうち3回は活版印刷であった。またこの4月から、進路指導課が設けられた。これまで進路指導に関する仕事は教務課が担当していたが、この年から進路指導課として独立し、進路指導のいっそうの充実がはかられることになったのである。

5月2日には春季遠足が実施され、1年生はゴロゴロ岳・東お多福山、2年生は森林植物園、3年生はロックガーデンにそれぞれ出かけた。17日の第19回対県西定期戦はまとも雨天中止となった。5月24日の職員会議では、1978(昭和53)年度の本校の予算が決定された。それによると教材費として県費備品費134万円、県費需要費220万5000円、またクラブ指導費・クラブ援助費・学習活動援助費などの生徒諸費は326万1040円であった。なお前年度の学校施設維持管理費の決算は1970万6550円、高等学校建設費は803万5000円である。

自治会選挙は5月18日から立候補の受付がはじまり、31日の締切りを5日間延期してようやく定員に達した。6月7日に立会演説会が開かれ、9日に信任投票が行なわれた。こうして第31代自治会執行委員会が19日に発足した。なお6月5日の文化部幹事会で、部の設立や解体を明記した「文化部規約」が制定された。この規約はさらに一部修正され、8月23日の文化部幹事会で「文化部規定」として発効した。

6月10日に第22回県高校総合体育大会がはじまり、1年生は開会式を見学した。この年の運動部は今一つ振るわなかつたが、軟式庭球・陸上が近畿大会に出場した。またサッカー部2年の藤田圭三君が

県の選抜チームの一員に選ばれ、県チームは国体で3位となり、藤田君は敢闘賞を受けた。一方、文化部は、6月15～17日に美術・写真・書道・華道部による校内展を開いた。また文化部活性化の試みとして、化学・物理・生物・地学の理科系4クラブが、共同で「サイエンス・ジャーナル」を定期的に発行することにした。そして将棋部が7月の県大会で団体優勝し、8月の全国大会に出場した。

7月10日から1学期期末考査がはじまったが、この日からバレーコートの東側プレハブ教室の取り壊しがはじまり、8月20日から格技場建築工事が着工された。格技場は鉄骨平家建、総面積423平方メートルで、内部は畳敷の柔道場および板張りの剣道場からなっていた。格技場は総工費2763万円で、山田建総の施工によって翌年1月5日に完成した。1月12日には道場開きが行なわれ、卒業生による柔道および剣道の形が披露された。また東側プレハブ教室が解体されたため、これまでそこを利用していた各部は西側プレハブ教室へ移動し、6教室に12のクラブが入ることになった。なお1980（昭和55）年には、嘉納治五郎氏の書「精力善用」が格技場に掲げられた。

9月26日に第30回記念祭の開幕式が行なわれた。この年の記念祭は、マンネリ化打破を目標に“創造性”ということがしばしば言われた。開幕式では弓道部によるアトラクションが行なわれた。4つの風船が見事に射抜かれて「記念祭30」の4文字が現われた時、手に汗していた生徒たちは惜しみない拍手を送った。27日の体育祭は、全校生徒の縦のつながりを重視し、1年から3年までの各クラスが一組となり、男女混合で競争する兄弟姉妹対抗リレーなど新企画がいろいろ考えられた。さらにこの日の午後6時からルナホールで、「アメリカ音楽の源流を探るコンサート」と銘打って、「サウス=サイド=ジャズバンド」と「シン上田&ホーボーズ」によるジャズを中心とした招待演奏会が行なわれた。司会はDJの小山乃里子氏で、また前年度に出演した川村ひさし（尚）氏も応援に駆けつけ、「アメリカ音楽って何だろう」と題して生徒たちに語りかけた。なお招待音楽会は、当初予定された「イ=ムジチ」第一

ヴァイオリン奏者であるフェリックス＝アーヨ氏が急病のため、このプログラムに変更されたものであった。28日はクラス展示と講堂での有志公演、29日はルナホールで文化部公演が行なわれた。そして30日は映画会と文化部展示、10月1日も引き続き文化部展示、そして閉幕式が行なわれた。なお講堂で開かれた映画会では、「第三の男」などが上映された。

10月16日から1年生が4泊5日の野外活動に出かけた。蓼科での野外活動が10年続いたのを期に、新たな野外活動のあり方が検討されてきた。そして前年度に実施された白馬での野外活動が好評であったため、この年も白馬に出かけることになった。19日には2・3年生の秋季遠足がクラス別に実施された。また24日には講演会が開かれ、笠原一男氏が「日本人の心」と題する講演を行なった。2学期末の12月20日には、自治会主催の映画会がルナホールで開かれた。なお、冬休み中に例年行なされていた高体連阪神支部主催のスキー教室は、参加希望者の減少や野外活動にスキーを取り入れる高校が増えたため、この年から実施されないことになった。年が明けた1月5日には、1年生のラグビー観戦が行なわれた。

1979（昭和54）年1月13・14日に、最初の共通第一次学力試験が実施された。第1日目は国語（100分）・理科（120分）、第2日目は社会（120分）・数学（100分）・外国語（100分）の5教科7科目の試験で、本試験は全国225会場で行なわれ、32万7140人が受験した。本校生は神戸商船大学で受験した。共通一次試験の出願受付は、1978（昭和53）年10月2日から16日までの間で行なわれ、卒業見込みの者および卒業者とも出身高校経由で願書を提出することになっていたため、10月5日まで校内で願書を取りまとめた。

共通一次試験の導入により、本校の3年生関係の行事も多少影響を受け、この年の3年生の父兄会は、6月28～30日および冬休み中の12月24～26日に行なわれた。また3学期初めに行なっていた県下一斎模擬試験は、かなり時期が早まって11月21・22日に実施された。そして本校からの共通一次試験受験者は、現役188名、浪人80名、あわせて268名であった。

また1000点満点の試験で、全国の平均点が636.07点に対して、本校の現役受験生の自己採点の結果は652.3点であった。なおこの年の本校の国公立大学進学状況は、これまでとそれほどの差は見られなかったが、翌年度からはしだいに減少していった。

第31代執行部は、記念祭の反省にたって記念祭春秋分離案に取り組んでいた。記念祭は本来、クラブの行事に力点がおかれるべきであるが、自治会員の関心がクラスに集まっている現状を考え、春はクラブ行事、秋はクラス行事にするというのが執行部の提案内容であった。春秋分離案は11月以来、執行委員会・文化部公聴会・代議員会などで討議が重ねられ、あるいはホームルームで説明されたりした。そして1月13日の生徒大会で分離案は採決され、僅少差で否決された。これまで歴代の自治会執行部は、しばしば記念祭の改革を考え、春実施案や春秋分離案などの構想を練ったが、容易に改革は実現しなかった。

2月3日に校内マラソン大会が開かれ、25日に芦高第31回卒業証書授与式が行なわれ、第34期生男子220名、女子223名、計443名が卒業した。3月17日には入学者選抜学力検査が行なわれ、20日に450名の合格者が発表された。なお、このころから、転勤を希望しない教職員が、県教委の計画交流の方針によって異動させられ、しばしば年度末に混乱が生じるようになった。1977（昭和52）年10月9日に、県教委は「勤続年数による計画交流」の通知を出し、新採用4年以上、同一校勤務9年以上の者などを計画交流の対象とした。この3月は計画交流の2年目にあたり、芦高でも数名の教師に転勤の内示があり、これに対して職員からの抗議が相次いだ。そして3月30日には臨時職員会議が開かれ、人事異動に関するまとめと次年度の校務運営を円滑にすることが話し合われた。

1979（昭和54）年4月1日に宮崎徹二郎校長が県立姫路東高等学校長に転出し、かわって県立東播磨高等学校長馬場鉄夫氏が、本校第11代校長に補せられた。またこの日、県立芦屋南高等学校が創立された。芦屋南高校は、同和教育の推進が強く呼ばれていたころに、芦屋市が新設を要望していたものであ

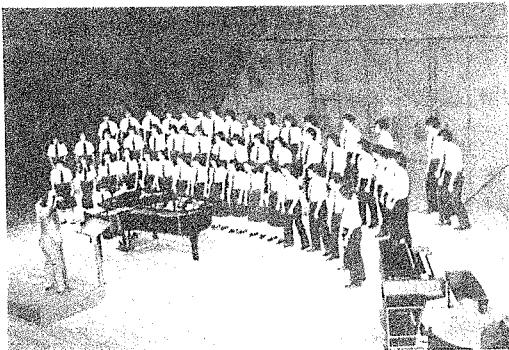
り、ようやく新設が決定し、この年の1月1日から本校に開設準備室が設置されていた。かつて白砂青松の海岸であった芦屋浜は、1969（昭和44）年に埋立てがはじまり、1975（昭和50）年に工事が完了した。ついで大規模な住宅団地の建設が着手され、芦屋南高校の開校と前後して、芦屋浜シーサイドタウンの入居もはじまっていた。4月12日は本校の創立記念日で、この年は39周年にあたっていた。そして4月18日の職員会議で、新1年生から2km以内の者は自転車通学を認めない方針が明文化された。25日は前年と同じく交通ストのため休校となり、この日予定されていた生徒大会は延期となった。そして28日に生徒大会が開かれ、前年度の決算および1979（昭和54）年度の予算が承認された。5月1日に社会科の寿賀正教諭が逝去され、3日の葬儀には職員や生徒たちが参列した。

5月2日に春季遠足が実施され、1年生は東お多福山、2年生は再度山、3年生は甲山方面へと出かけた。このところ雨や交通ストなどで中止になることが多かった定期戦は、16日に曇天のもとで実施された。この年は第20回目を記念して「定期戦旗」が作られ、前年までの「日の丸」にかわって5月の空に翻った。試合は12-10で辛くも芦高が勝利をおさめた。そして24~28日の中間考査の後、30・31日に3年生の一泊旅行が実施された。費用は前年と同じく1万円以内、生徒の小遣は3000円程度までで、この年の宿泊地は、京都・大津・彦根・伊賀上野・桜井市多武峰であった。生徒の62パーセントが参加してよかったですと答えており、また2泊を望む声も多かった。しかし、睡眠不足で翌日の行動が鈍くなつたとか、女子が少ない理系クラスは行事の展開に苦慮したなどの反省点が指摘された。

6月9日に第23回県高校総合体育大会が開かれ、この日は2時間授業であった。県高校総体では弓道部が女子個人戦の近的で優勝し、8月の全国高校総体に陸上競技部とともに出場した。また弓道部は、兵庫県秋季大会でも女子が近的の個人および団体で優勝するなどした。この年の運動部の活躍としては、硬式庭球部女子が関西ジュニア大会および全国ジュニア選手権に出場するなどした。サッカー部3

年の藤田圭三君は、前年に続いて県選抜チームのメンバーに選ばれ、主将として10月の宮崎国体に出場した。文化部では、将棋部が県高校王将戦でB級優勝をとげた。

6月22日に自治会役員の引き継ぎ式が行なわれ、第32代自治会執行委員会が成立した。この年も候補者がなかなか定数に達せず、立候補受付期間を延長して信任投票が行なわれた。前執行部は記念祭が文化部を中心とするべきだと理由で、春秋分離案を提案したが、新執行部も記念祭を文化部中心のものにしようと考えた。そこで文化部公演を2度行なうことと骨子に準備をすすめた。



第31回記念祭

9月25日午後1時から開幕式が行なわれ、第31回記念祭がはじまった。26日はルナホールで文化部公演PART 1として、午前の部は1年生、午後の部は2年生が入場して公演が行なわれた。そして29日にはPART 2として、今度は逆に2年生が午前の部、1年生が午後の部に分かれて入場した。文化部公演には放送部・E・S・S・落語研究部・演劇部・コーラス部・ギター研究部・邦楽部・吹奏楽部が出演し、騒々しい野次や口笛が飛びかったものの、この企画は好評であった。27日は体育祭、28日はクラス展示と有志公演、30日は文化部展示であった。文化部展示は前年のだらけた雰囲気への反省から、この年は1日だけとなった。また30日には映画会が開かれ、「ラストコンサート」および「青春」が上映された。さらに市立伊丹高校とのバスケットボール部の招待試合も行なわれた。この日は台風の襲来が心配され、前日には執行部は遅くまで残ってその対策を話し合った。そして終幕祭後のコンパは禁止となり、教

師が喫茶店などを巡回し、コンパを行なっているクラスを解散させた。

記念祭後の職員会議では、高校生の気持を配慮しつつも、コンパの問題点がいろいろ指摘され、12月5日の職員会議で記念祭終了後のクラス会（クラスコンパ）は禁止と決まり、さらに「クラス会についての内規」が定められた。その主な点は、

1. クラス会と称して会合を開く時は、少なくともクラス構成員の半数以上が参加することを最低必要条件とする
2. クラス会を企画する時には必ず担任教師と相談し、その承認を受けなければならない
5. クラス会の終了時刻は、いかなる場合でも午後8時00分をこえてはならない
6. クラス会の参加費用は、高校生としての常識的範囲内（現在では1000円以内）とする
7. クラス会を開催できる期間は各学期の期末試験終了後、及び春、夏、冬の休暇中を原則とする

などであった。

10月15日に1年生が白馬における4泊5日の野外活動に出発した。「日本アルプスの雄大な自然にふれ、集団生活を通じて自己を見つめよう」ということが、野外活動の目的である。この時の反省事項としては、行動予定が頭に入っていない、就寝時刻が守っていない、美術館見学などの事前教育の不足、目的を理解していない生徒が多いなどが挙げられた。また生徒にとって最も印象に残ったこととしては、閉村式、就寝前の雑談、自然の美しさ、芸能会などが挙げられている。19日は2・3年生の秋季遠足の予定であったが、台風20号接近のために中止され、休校となった。

前年から11月下旬に時期が早まった3年生の県下一致模擬試験は、この年も11月20・21日に実施された。そして2年目を迎えた共通一次試験は、多少の微調整がなされた。前年度に出身高校経由とされていた浪人の出願は、大学入試センターに直接出願することになった。また大学入試センターは願書を受け取ると、受験生に確認葉書を送ることにした。マークもれやミスに対する注意も、試験終了10分前

を改め、終了後に行なうことになった。さらに正解発表もその日の試験が終るごとから、2日目終了後にまとめて行なわれることとされ、この年の本校の共通一次出願者は、3年生180名、卒業生100名であった。

2回目の共通一次試験は、1980（昭和55）年1月12・13日に実施され、本校3年生の受験者は167名であった。この年、全国では前年よりやや多い33万3026名が受験したが、実際には現役の受験生は減少した。科目間の難易差は本校生にもただちに反映した。とくにその差が著しかった社会科の選択状況を前年度と比較してみると、倫社が22人から34人、政経が27人から56人へと増加し、日本史が151人から103人、世界史が142人から118人へと激減している。またこの年の全国平均が617.36点、本校3年生は640.1点であった。なお国公立4年制大学の現役合格者は、前年の54人から35人へとかなり減少した。

1月5日に1年生のラグビー観戦、2月2日に校内マラソン大会が実施された。従来、男子は8000m、女子は4000mのマラソンコースが、この年から男子は1万m、女子は5000mに延長された。そして2月25日に芦高第32回卒業証書授与式が行なわれ、第35期生男子231名、女子217名、計448名が卒業した。

3月17日には高校入学者選抜学力検査が行なわれ、20日に450名の合格者が発表された。なお入試当日の17日午後にはルナホールで2年生の文楽鑑賞会が開かれ21日には同じくルナホールで自治会主催の映画会が開かれ、「追憶」が上映された。終業式が行なわれた3月22日に、職員の人事異動に関する内示が行なわれたが、この年もまた計画交流に対する不満の声が職員の間から上がった。